

『風俗画報』の余命 槌田満文

夏目漱石の自伝的長編「道草」(大正四年作)には、まったく異質な二つの世界が対置されている。外国留学から帰ってきてきて大学で教えている主人公健三の内面的な世界は、十数年前に縁を切ったはずの養父島田が持ち込んできた世俗的な世界との交渉によって乱された。社会的地位ほどには経済的余裕のない健三は、養父のたび重なる要求に悩まされたあげく、親類があいだに入って、かなりまとまった手切れ金で一応のかたをつける。そして、ホッとした妻のお住に向かつて健三はいう。「世の中に片付くなんてものは殆どありません。一遍起った事は何時迄も続くのさ。……」

この学問と世俗の二つの世界が、書物というものをめぐってきわめて対比的に描き出されている一節がある。健三は従兄比田の家へ、兄の長太郎と養父の件を相談するために出かけてゆくが、兄がなかなか現われないので、比田は健三と書物の話で間をもたせようとした。しかし「私しや旧弊だから斯ういふ古い講談物が好きでしてね」と『常山紀談』を示す比田の読書生活と、毎日洋書と取り組んで時間の不足にイライラしている健三のそれは、あまりにもかけはなれていた。

「兄が約束の時間迄に顔を出さないの、比田は其間を繋ぐためか、しきりに書物の話をつげやうとした。書物の事なら何時迄話してゐても、健三にとつて迷惑にならないといふ自信でも持っているやうに見えた。不幸にして彼の知識は、常山紀談を普通の講談ものとして考へる程度であった。それでも彼は昔出た風俗画報を一冊残らず綴じて持っていた。……」

ここに突然登場する『風俗画報』という雑誌は、比田が愛読する定期購読誌として扱われている。しかし「それでも」という接続詞が使われているところを見ると、「常山紀談を普通の講談ものとして考へる程度」の知識しか持たない比田が『風俗画報』のバックナンバーをそろえていることは、なんとなくふさわしくないといったニュアンスが感じられる。

学者健三の世界は『風俗画報』とほとんどかわりがないが、しかし『風俗画報』の内容は勤め人比田の世界にそぐわないのではないのか。——作者漱石は『風俗画報』に対してそのような認識を持っていたとみられるのである。

□

絵画や写真を重視した『風俗画報』は、わが国グラフ雑誌のさきがけであった。ジャーナリズム史研究の上で見のがすことのできない文献であるが、「道草」の一節にもみられるように、従来必ずしも安定した評価を得ていたとはいえない。しかし、近年明治文献、国書刊行会の二社から完全複製が同時に刊行されるなど新たな注目を浴びつつあることは、その重要性を証するものであらう。

明治二十二年二月に創刊された『風俗画報』は、大正五年三月に終刊号を出すまで、通巻四百七十八号を数えた。ただ明治四十一年四月以降の増刊は号数にはいっていないために、総冊数は通巻号数より三十九冊多く、五百十七冊となっている。

出版元の東陽堂は明治二十年二月に美術専門の月刊誌『絵画叢誌』を創刊した印刷・出版業で、設立者は山形県米沢市出身の吾妻健三郎（一八五六—一九一三）であった。彼は明治六年十七才で上京し、苦学して大学南校に理化学、製煉工作の諸科を学び、教授ワグネルについて銅版印刷の技術を研究している。独立して日本橋葺屋町に東陽堂を開業したのは、明治九年三月のことである。

現在の週刊誌に近い四六倍判の『風俗画報』は、創刊号から毎号多くの石版画を掲載した。文明開化のムードを反映した石版画は明治二十年代にその全盛期を迎えたが、最初の石版グラフィック『風俗画報』はその波に乗って三十年代にもっとも隆盛となり、「新撰東京名所図会」をピークとする増刊をさかんに発行している。

画報という新しいスタイルが圧倒的な人気を得たことは、明治三十一年創刊の『世事画報』、三十六年創刊の『東洋画報』など、亜

流の画報雑誌が続々と生まれた事実からも想像できよう。これらのなかで現在もつづいているのは、国木田独歩が明治三十八年に創刊した『婦人画報』一誌にすぎない。

月刊の『風俗画報』は博覧会、災害、祝典、戦争などに際して、頻繁に特集号を刊行した。その皮切りは明治二十三年四月号（第十五号）の「第三回内国勸業博覧会」である。二十六年十一月からは、十一月号（第六十号）のほかに、増刊「江戸歳事記」上（第六十一号）を出した。以後月二冊発行というケースがふえてゆく。

明治二十七年九月に始まる「日清戦争図絵」（第七十八号から第九十六号までに計十冊、第八十四号以降は「征清図絵」と改題）の報道は、もっぱら石版記録画によるものであった。それが明治三十八年二月に始まる「征露図絵」（第二百八十四号から第三百三十三号までに計二十八冊、ほかに「凱旋図絵」五冊）になると、木版や石版画にまじって写真版が目立ってふえてくる。『風俗画報』にはじめて写真が挿入されたのは、明治三十一年十月（第百七十四号）からであった。

明治二十九年九月から完結までに十四年間を費した「新撰東京名所図会」シリーズ（「上野公園之部」から「深川区之部」まで計六十四冊、ほかに「東京近郊名所図会」計十七冊）の第一編（上野公園之部上）には、石版画が十七枚入っているが、写真はまだ一枚もない。しかし、その比率は三十年代後半に逆転し、四十二年三月の第六十五編（深川区之部三）になると、石版画八枚に対して、写真は二十六枚（五ページ）という変化をみせている。

週刊誌の草分けとなった『週刊朝日』『サンデー毎日』が創刊されたのは大正十一年であった。翌年には写真によるグラフ雑誌『アサヒグラフ』がスタートしている。大正五年の『風俗画報』の廃刊

は、石版グラフィック時代にペリオドを打つものだったのである。石版記録画が報道写真にとってかわられた運命は、あたかも明治の新建材だった煉瓦が、大正期のコンクリート建築にその座を奪われ、また開化の象徴としての人力車が、関東大震災以後の自動車時代にほとんど姿を消してしまったケースと、ほぼ軌を一にするといつてよいであろう。

大正時代にはいつてからの『風俗画報』は、石版画中心だった最盛期の精彩をとみに失い、写真グラフィックへの脱皮に失敗して、読者を次第に失っていった。終刊号となった第四百七十八号（大正五年三月）の巻末に記された「編輯局より」に「印刷所の変更より彼是種々の故障を来し、加之ならず発刊期日さへも遅延せし程の有様に候ひしは、是亦た杜撰の極みにこれあり……」とあるのをみても、創刊当初や全盛期には想像もできなかったような末期的狀況だったとみられるのである。

『風俗画報』が創刊された明治二十二年二月には、帝国憲法が發布されている。鹿鳴館時代をピークとする欧化主義の風潮が、ようやく反省期に入ろうとする時期であった。明治二十年創刊の『維新史料』、二十二年創刊の『江戸会雑誌』などとともに、画報がそのような民間にたかまってきた機運にうながされて誕生したことは、創刊号の「論説」にみられる次の一節でも明らかであろう。

「……吾人は幕府の末造より維新の今日に至るの間を回想するに、世運の進化遷移の状態は極めて迅速急劇なること、行雲の眼を

過ぎ、飛鳥の水に映ずるが如く、顧眄の間旧態消滅して新様前に横はり、殆ど応接の違あらざらしむ。今に於て其の一々を説かんと欲するも、十中の八九は既に茫乎として夢幻泡影に随て消散せしにあらずや。乃ち画報により其の形を印象し、其の声を文章にするととき、以前よりして存するもの愈々頹はれ、今及び後の状態は広く布き永く伝へて滅ぶる時なく、現今将来共に歴史学芸上に益すること決して鮮少にあらざるを信ず。是則ち風俗画報を發行する所以の主意なり。」

創刊号は本文二十七ページ、広告三ページで、一部十銭であった。内容は論説、人専門、服飾門、飲食門、土木門、器財門、動植門、叢談、漫録、詞林の十部門に分けられている。それらの文章のほかに、八咫鳥図（松本楓湖画）幕府時代正月之図（小林永濯画）法然上人画巻出産図（川崎千虎画）など、画報の特色とする図版十枚が挿入されていた。

『風俗画報』が主眼とした編集方針を大別すれば、江戸時代風俗の考証、刊行時における東京新風俗の記録、全国に伝わる地方風俗の紹介の三つと見なすことができる。創刊号でも、「幕府年中行事」の再録、「現今婦人の髪容」の図解、屋代弘賢遺稿「諸國風俗問状」の解説などに、すでにその方針がうかがわれるが、創刊当初は時流を反映して、江戸風俗研究にもっともウエイトがかけられていた。

第二号（明治二十二年三月）には、憲法発布式正殿式場之図、親兵式行幸図など八図を取めた「憲法発布式御次第 付親兵式及府下經典の景況」といったトピックス、京阪神での見聞を記した北巖野史（野口勝一）による「関西風俗談」などとともに、高橋又太郎編「徳川時代江戸

服飾の變革」、乙羽庵主人「流行落書」、山下重民「門松考」、依田百川(学海)「畫師歌川貞秀が話」など、江戸風俗に関する文章が多い。このうち高橋又太郎、乙羽庵主人とあるのは、いずれも渡部又太郎のちの高橋乙羽であった。

□

高橋乙羽(一八六九—一九〇二)は、明治二年山形県米沢市市立町に旅館音羽屋を営む渡部家の六男として生まれた。本名は又太郎、乙羽と号したのは生家の屋号音羽屋にちなむという。父の没後、高橋家に嫁した叔母の養子となった。高橋又太郎の署名はその縁によるものである。

小学校卒業後、山形市の呉服商に奉公したが、文才、画才に富むところから、友人たちと雑誌を作った。明治二十一年七月、小野川温泉で磐梯山の火爆発に遭遇し、その実見記を『出羽新聞』に寄せたところ、たまたま帰省中だった同郷の東陽堂店主吾妻健三郎にその筆力を認められ、上京して東陽堂に入り、美術記者として『絵画叢誌』の編集に当たることになった。

『風俗画報』には第二号(明治二十二年三月)以後頻繁に筆を執り、第三号(同年四月)には「徳川時代武家土木談」、第四号(同年五月)から「日本駅通の沿革」、第十七号(二十三年六月)から「浅草の賑ひ」第十八号(同年七月)から「奥州旅日記」、第二十号(同年九月)に「唐太狗草」、第二十一号(同年十月)に「秋寺の記」を発表するなど、江戸研究、世相ルポルターシュ、旅行記といった多面的な執筆活動を続けている。

また、石橋思案を通じて硯友社の同人となり、小説「京屋の娘」(明治二十三年三月四月作)、「露小袖」(同年十月作)、「霜夜の虫」(二十四年三月作)などによって、作家としての地歩を築いた。二十六年に博文館から『上杉鷹山公』を刊行した際、挿絵を担当した同郷の画家寺崎広業の紹介で博文館社主大橋佐平を知ったが、乙羽の人物を見込んだ佐平は長女時子と乙羽を結婚させ、博文館の營業担当重役として大橋家に迎え入れた。

乙羽は東陽堂を去つてのちも『風俗画報』にはしばしば寄稿している。小説以外にも『千山万水』『耶馬溪』などの紀行文集で知られた。明治三十三年欧米に遊び、帰朝後『欧山米水』を刊行したが、三十四年に三十三歳の若さで没している。

内田不知庵(魯庵)は、ジャーナリストとしての乙羽について「乙羽子が初め従事せしは絵画叢誌及び風俗画報の二雑誌編輯にして、二雑誌の声価ある氏が力に負ふ処少からず。氏が雑誌の材料を採集する極めて細心周到にして博く群書を借覽し或は遍く博識の士を訪ふて質し考証益々深くして曾て飽くを知らざるなり。子が造詣の深きは蓋し爰に原づく。……」と「乙羽子の貯金文学」(明治三十二年五月)に記した。

その才能、人格についても「小説、隨筆、紀行等は勿論漢詩、和歌、都々逸、端唄、新詠詩の末に到るまで凡そ文事に関するもの必ず試みざるはなく、同時に写真家、旅行家、美術家として聞え、且つ善良なる交際家、篤実なる商業家として知らるゝもの豈に稀に見る奇才ならずや。……」と賞揚している。乙羽は『風俗画報』の誌風確立にもっとも貢献した多才、篤実の文人として記憶されてよいであらう。

渡部乙羽に次いで『風俗画報』編集の中心的存在となったのは、山下重民である。乙羽とともに第二号（明治二十二年三月）に「門松考」を発表して以来、頻繁に寄稿した重民は、大蔵省官房第一課に勤務するかわら東陽堂に關係して、二十七年からは『風俗画報』の編輯員に加わった。「新撰東京名所図会」「東京近郊名所図会」の取材執筆に、始めから終わりまで従事したのは重民と画家山本松谷の二人だけである。

「新撰東京名所図会」深川区之部三（明治四十二年三月）の巻末に、重民は「新撰東京名所図会市内の部、茲に終りを告ぐ。回顧すれば、其の間星霜を経る十有三年、従事者の交迭十数人。而して其舉は余の主唱に係るを以て、他の従事者の屢々交迭せしに拘はらず、余は終始之に着手し、下谷区以下に至りては、他の従事者悉く去り、余一人にて専ら筆を執り、古今の沿革を記載し、本編を以て完成せり。……」という書き出しの「啓告」を載せている。

そして、次のような体験談を読むと、重民の孤軍奮闘ぶりに感動しないではいられない。「こゝに聊か調査の苦辛談を擧げむに、記者親ら社寺を訪ふて其の沿革を尋ぬるも、或は疑ふて語らざるあり。或は語るも要領を得ざるあり。或は旧記焼失して明確ならざるあり。或は主管者屢々不在にて徒勞に屬するあり。或は書を發して尋問するも、容易に回答せざるものあり。其の甚しきは、絶対に峻拒して一切に語らざるあり。因て分明ならざるものは、之を故老に質し、之を図書に考へ、記載するを常とせり。其の碑を尋ね墓を探

る時の如き、或は残欠し或は埋埋しあるが為め、遂に写し得ざるものあり。或は鮮苔を剝ぎ、或は汚泥を滌ひ、數回摩擦して纒かに読むを得るものあり。或は俄かに風雨に遇ひ、漸く薄暮に迫り、一碑一墓尚ほ一日にして写すこと能はざるものあり。或は寺前の人家に故老を尋ねて其の事を問ふに、二三日前に転居し來り、未だ附近の事を聞知せずといふが如き滑稽談もあり。社寺に關する搜索の一事を概擧するも、実に此の如し。其の他の事蹟推して知るべし。江戸名所図会は三世を経て成りしものにして、其の略叙彼の如し。時勢同じからずと雖も、短時日を以て調査せし余輩の苦辛は、偏に読者諸子の推察を請はむとする所なり。……」

重民の孫に当たる山下重一（国学院大教授が編んだ『回顧実録——山下重民文集』（昭和四十七年九月刊、私家版）の解説によれば、明治末年まで大蔵省に勤務していた重民は、夕方から夜にかけて東陽堂で『風俗画報』の編集に従事し、帰宅は連日深更に及んだという。「新撰東京名所図会」の实地調査も主として日曜日をつぶして行われたというから、その精勵ぶりに脱帽せざるを得ない。

山下重民（一八五七—一九四二）は幼名を金次郎といい、父は幕府表銃隊取締役であった。安政四年に千駄谷十軒町（現在の四谷区霞町）に生まれている。明治三年十三歳で太政官に勤め、十二年大蔵省雇として旧幕府理財会要取調掛に任ぜられた。『回顧実録』所収の「自伝」によれば、はじめ詩を植村芦州に学び、のちに大沼枕山についている。

東陽堂の『風俗画報』には創刊当初から關係し、渡部乙羽が明治二十七年十二月に博文館主大橋家の人となつてからは、そのあとを承けて編集を主宰した。四十三年に大蔵省を退き、画報の編集に専

念したが、大正三年には東陽堂を退き、四年から社友となつてゐる。『風俗画報』への寄稿は、第四百七十三号（大正四年九月）の「傾城の文字に就て」が最後であつた。創刊から廃刊までの二十七年間に、もっとも永く深く『風俗画報』の編集にかかわつた人物といえるであらう。

□

以上述べてきたところによつても、『風俗画報』が果たした歴史的役割、編集担当者が傾注した雑誌作りの努力は、亜流の画報雑誌といささか類を異にしていたことが想察できる。「道草」の作者漱石が『風俗画報』を単なる通俗雑誌と見ていなかったこともうなずけるのである。

全国に伝わる地方風俗の紹介に関しては、第五号（明治二十二年六月）の「粥釣」（土佐 高村眠水）以後、たとえば「南部の絵曆」（青森県 丸山茂）「盆踊及ぼんならさん」（名古屋 平出鏗二郎）「阿武の戴き」（徳島 鳥居龍藏）といった地方在住の読者、学究による投書が、毎号のように掲載されたことに注目しななければならない。

柳田国男の民俗学に関する最初の著作『後狩詞記』が自家出版されたのは明治四十二年三月のことであり、最初の研究雑誌『郷土研究』が創刊されたのは、それから四年を経た大正二年三月であつた。学問的体系を欠いた好事家的な取り組みかたが目につくといへ、『風俗画報』に二十年以上も掲載されつづけた全国の地方風俗の紹介が、日本民俗学発足への地ならしの役割をつとめたことは否定できないであらう。

事実、柳田自身「日本の民俗学」（大正十五年四月）の「フオクロアの成長」という章で「近年書物の形を以て地方別に分類覆刻したジエントルマンスマガジーンの投書集なども、つまりは後年のフオクロアに他ならぬのであつた。古い民謡俚諺地名家名其他の方言、珍しい迷信曆法禁厭の類を、互ひに紹介して知見を弘めることは、日本の風俗画報などと似たものであつた。……」と述べているのである。今後『風俗画報』の投書を民俗学の立場から新たに洗い直す作業がなされてしかるべきではなからうか。

昨今の「江戸ブーム」のせいか、中央公論社の『三田村鳶魚全集』が多くの読者を獲得しているという。鳶魚が発表した処女論考「甲斐方言考」は、『風俗画報』の第三百七号（明治三十八年一月）から二十二回にわたつて連載されたものであり、鳶魚は四十一年五月から『日本及日本人』に発表の場を持つまで、すべて『風俗画報』に寄稿している。『風俗画報』にばらばらに掲載された江戸風俗の考証や研究を、総合的にまとめる仕事もまた、これからの意義ある課題といわねばなるまい。

昭和十七年五月、病没直前の山下重民は、宮尾しげを編『風俗画報索引』の序文の一節に「想ふに此書一出検索に便宜なるを以て、必らずや再読活用するものあるに至らむ。余是に於て更に以爲らる風俗画報猶ほ余命ありと。」と記した。それから三十数年を経たいま、やはり「風俗画報猶ほ余命あり」といつてもよいのではなからうか。